

会派視察報告書

平成 30 年 10 月 29 日

市政会 石川 智子

1. テーマ 第 80 回全国都市問題会議 市民協働による公共の拠点づくり
2. 日程 平成 30 年 10 月 11 日(木)～平成 30 年 10 月 12 日(金)
3. 会場 新潟県長岡市 シティホールプラザアオーレ長岡 他
4. 主催 全国市長会 後藤・安田記念東京都市研究会 日本都市センター 長岡市
5. 内容

～1 日目～ 10 月 11 日(木)

◇開会式

◇基調講演：地方分権へのまなざし

東京大学史料編纂所教授 本郷 和人 氏

- ・江戸時代 それぞれの藩、それぞれの地域で教育があり、英才が育てられた。
- ・黒船が生み出した「明治維新」。世襲にとらわれず才能を登用する。各地から英才が東京に集まり、強力な中央集権が図られた。
- ・今こそ、明治の中央集権とは逆に、地方の自治権を強く推し進めるべきではないか。国力をおとすにはいけない。地方からのボトムアップこそが、新しい日本を支えていく。

◇主報告：長岡市の市民協働

新潟県長岡市長 磯田 達伸 氏

「市民協働による公共の拠点づくり」いかに行政と市民が協力し、魅力的なまちづくりをしていくかについて

・「米百俵の精神」

今年長岡市は、牧野家初代長岡藩主・忠成による開府から 400 年、北越戊辰戦争から 150 年の節目の年。戊辰戦争に敗れた長岡藩に、支藩から見舞いとして送られた百俵の米を藩士らに分配せず、教育の大切さを説いて国漢学校設立の資金に充てた。「何事も基本は人。人づくりこそすべての根幹である」という考え方は、現在の長岡のまちづくりに活かされている。

- ・平成 24 年 6 月に市民協働条例を制定。条例検討委員会の議論のほか、市内全域で 30 回のワークショップを開催し、1000 人を超える市民の声を反映した。

・市民協働の場「アオーレ長岡」

平成 24 年 4 月に JR 長岡駅前にオープン。「市民との協働のまちづくり」の実証実験として、中心市街地の民間の空きビルを借りて平成 13 年 10 月にオープンしたながおか市民センターの実績を踏まえ、駅から約 2 km の距離にあった市役所本庁舎を移転したもの。新国立競技場の設計者でもある隈研吾氏の設計。

「アオーレ」とは「会いましょう」という意味。人々が出会い、活動する拠点。

・平成 28 年 5 月に発足した中越文化・観光産業支援機構では、地域の歴史・文化を生かした広域観光事業に取り組んでいる。平成 28 年 7 月に、日本人初のビール醸造技師・中川清兵衛の生誕の地である与板地域に「与板★中川清兵衛記念 BBQ ビール園」を開設。2020 年に向けて「長岡花火」と「醸造のまち・摂田屋」を通年で PR する 2 つの交流拠点を整備している。

・災害に強いまちへ 企業開発による取り組み アレルゲンフリーの米粉クッキーを備蓄

・司馬遼太郎「峠」を映画化 2020 年東京オリンピック開催に合わせて

・若者が活躍できるまちづくり

将来のまちの活力維持や人口減少社会の諸問題を克服するため、長岡版総合戦略「長岡リジュベネーション~長岡若返り戦略~」を平成 27 年 10 月に策定。その推進組織として、市内 29 機関が参画する「ながおか・若者・しごと機構」を平成 27 年 12 月に設立。若者自らが長岡の魅力発信やまちの活性化に取り組んでいる。

・「NaDeC(ナデック)構想」の推進

・長岡版イノベーションの推進

市政のあらゆる分野に先端技術や新たな発想を取り入れる。

「米百俵の精神」が息づく長岡として、次の 100 年を創り出す「人づくり」と「未来への投資」を行う「新しい米百俵」に全力で取り組んでいる。

◇一般報告：市民との対話と連携で進める津市の公共施設マネジメント

三重県津市市長 前葉 泰幸 氏

津市長 1 期目は、懸案処理を進める中で公共施設マネジメントにおける対話と連携は、客観的な情勢に合わせ必要に迫られて行った感が強かったが、2 期目の現在は、地域懇談会(37 ブロック、年 2 回)を実施し、市民との対話と連携をより徹底。地域の課題を聞き、受け止め、次の懇談会までに解決策を探る。地域の関心事項の中には、公共施設に関わる事項も多く、自然な流れで対話と連携が継続し、公共施設の整備や改築、用途変更や廃止につながっていく事例が生まれた。

①義務教育学校「みさとの丘学園」

旧美里村地区の 3 つの小学校の統合の場所をその地域唯一の中学校敷地とすることで、三重県初となる小中一貫の 9 年制義務教育学校「みさとの丘学園」を開校。「小学校の統合」という後ろ向きの課題が、「義務教育学校新設」という新しく前向きな挑戦へと姿を変えたことで、地域住民の熱意が高まり、懸案が一気に解決へと向かった。

②認定こども園「津みどりの森こども園」

働き方の変化を受け、公立幼稚園の園児数が減り続ける一方で保育園の需要は増え、待機児童が発生。すでに極端に園児が減少していた幼稚園を統合したばかりだったが、幼稚園における幼児教育に必要な集団規模の確保と保育提供量の拡充を図るため、さらに、幼稚園と保育園を再編し、津市初の幼保連携型認定こども園「津みどりの森こども園」を整備。

地区内から幼稚園や保育園がなくなり、活気がなくなってしまうのではないかという地元の危機意識が強かったが、これらの廃園舎や園敷地を活用した地域活性化事業をワンパッケージで提案(園

跡地に老朽化した町会館を移転新築、園舎を改修して老朽化した公民館を移転)。複数の地域を面的に俯瞰して幼保連携型こども園、コミュニティ施設及び公民館の整備をセットで提案したからこそ、世代を超えて地域住民に広く理解をしてもらえたと考える。

市民から出てきたアイデアをどうやって受け止めていくのか、また、行政が持つ情報をすべてオープンにし、市民との徹底した議論を丁寧に行うことで具体的な絵が描けたとのこと。

市民協働とは、単に行政が市民任せにするのではなく、情報を1番よく知っている行政がそれをオープンにして責任を持って案を示し、その案について市民の意見をたくさん聞いて、柔軟に対応することが大切。

市民に「言っても無駄じゃない」という気持ちを持ってもらう。そして、行政・政治に関心を持ってもらうことで、市民協働が進んでいく。

◇一般報告：場所の時代

建築家・東京大学教授 隈 研吾 氏

- ・ 中心市街地の空洞化→人が集まる中心市街地にしたい。
- ・ 広場が主役→中土間(ナカドマ)のある市役所
ナカドマは、雪国ならではの全天候対応の木漏れ日が入るような屋根付きで、耐震設計されている。駅から雨にぬれずに来ることができ、バリアフリーでまちの一部になっていて、土間からスムーズに入ってくるイメージ。玄関ではなく勝手口から入るような親しみやすさをもたせた。庭のようでも部屋のようにもあるナカドマ(屋根付き広場)は、建物中央に挟み込まれるように配置。
- ・ テラスにベンチをやめて椅子を置くことで、人が集まるスペースに。
- ・ テラスでは子ども達が宿題をしたり、ナカドマではグルメ屋台を出すイベントが開催されたり、子どもからお年寄りまで、たくさん人が集まる場所になっている。「高校生長岡ラーメン選手権」結婚式、ビアフェスタなど。
- ・ 年間利用者 125 万人。
- ・ 木の質感を生かしたデザインが特徴的。内装外装ともに木製パネルは、地場産の杉の間伐材を使用している。
- ・ アリーナ内の木パネルには、旧厚生会館の緞帳(どんちょう)やフローリング材を再利用。

◇一般報告：アオーレ長岡の発注者として

筑波大学客員教授 森 民夫 氏

良いソフトは計画的に設計された良いハードから生まれる関係にある。長岡市の中心というハレの場に存在するアオーレ長岡から発散される心地よい空間が、市民の創造力を刺激し行政の予想を超える使い方がなされると確信していた。

- ・ 「中心市街地の活性化」の政策目的を、多くの市民は「商店街の活性化」より「市民の誇り」の問題と認識。「市民の誇り」を取り戻すためのにぎわいの創出。
- ・ 市役所機能の分散配置とワンストップサービス

分散によるサービスの低下を防ぐ総合窓口を5年かけて検討した。

- ・ガラス張りの「市長室」、1階にガラス張りの「市議会議場」により、市民が積極的に目にする。
- ・アオーレ長岡…①行政・公会堂・市民協働センターなどの機能を複合
 - ②ハレの場として、自由なイベントを創出する
 - ③まちづくりの一環として周辺との相互関係を生む
 - ④市民の手による全面的な運営体制

◇一般報告：アオーレ長岡での市民協働の実践

アートディレクター 森本 千絵 氏

- ・時代と建物をつくるのは、人。
- ・他人事ではなく自分事のようにしたくて、ワークショップでたくさん話を聞き、市民がやりたいことや伝えたいことが増えてきた→映像化
- ・アオーレバードが市民とまちをつなぐ幸せの象徴。

～2日目～ 10月12日(金)

◇パネルディスカッション

〔コーディネーター〕	明治大学政治経済学部地域行政学科長・教授	牛山久仁彦 氏
〔パネリスト〕	東京理科大学理工学部建築学科教授	伊藤 香織 氏
	NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長	奥山千鶴子 氏
	長岡市国際交流センター「地球広場」センター長	羽賀 友信 氏
	埼玉県和光市長	松本 武洋 氏
	高知県須崎市長	楠瀬 耕作 氏

テーマ「市民協働による公共の拠点づくり」

行政の施策のみならず、協働ですすめていくことが重要。

高知県須崎市長 楠瀬 耕作 氏

- ・持続可能なまちづくりに向けて

全国平均より約10年早く進む高齢化、人口減少が進行する須崎市では、住民の自治力強化に取り組んでいる。防災を切り口とした自主防災組織、市内7地区の公民館を中心とした地域自主組織、集落活動センターの取り組みの中で、中心的に活動する人材育成や、各世代各地域に共通する心の拠点づくりをベースとしている。

- ①須崎未来塾～まちづくりのエンジン～ 人材育成が重要な位置づけ
- ②市街地再生～空き家利用～ すさきまちかどギャラリー、上原邸
- ③集落活動センターあわ～住民自治を目指して～

埼玉県和光市長 松本 武洋 氏

従来型の自治会やコミュニティ施設を通じた地域づくりでは取りこぼしかねない、地域に根ざさない市民が増えているため、所在する地域とは直接的には関係なく、全市的な役割を担っている特定の機能を持つ新たな拠点を、市民とともに展開。地域包括ケアの拠点づくりにおいて、大胆な民間との協働を推進。現在、地域包括支援センターはすべて民間が運営、デイサービス等の拠点も民間が担っている。

①まちかど健康相談室

高齢者の居場所、健康学習の場として地域包括ケアの推進に貢献。

②もくれんハウス

妊娠から青少年期までを切れ目なく支援するわこう版ネウボラ制度が始まり、和光市北第二子育て世代包括支援センターとしても役割を担う。

東京理科大学工学部建築学科教授 伊藤 香織 氏

・シビックプライド「都市に対する市民の誇り」

地域愛、郷土愛に似ているが、当事者意識に基づく自負心

まちのなかの象徴となるものやこと、市民の行動として表れてくる特性

・コミュニケーションポイント

市民と都市との接点となるものやこと

シビックプライドそのものをデザインすることはできないが、コミュニケーションポイントはデザインできる。施設を設けるだけでなく、まちにとってどのような象徴的な建築物になり得るのか、活動が広がって魅力的な公共空間をつくりだすのか、そこで活動はどのように発信されるのかなど、コミュニケーションポイントの連携をデザインし続ける必要がある。間口を広く構え、コアな人材を育成し、目的を持って来る人だけでなく多くの人の目に触れ、離れたところでもその場所の何らかのエッセンスを感じることでできる接点を用意するような拠点づくりが必要とされている。

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長 奥山千鶴子 氏

- ・子育て家庭の流動性は高く、ひろば全協の全国アンケートに調査によると、「自分の育った市区町村以外で子育てする母親」は全国平均で全体の72.1%に達している。「アウェイ育児」孤立した子育てになる傾向がある。
- ・地域子育て支援拠点事業は、全国7000か所まで広がっている。拠点利用後は、子育ての仲間ができ、情報や地域とのつながりがひろがっていることが確認できた。子ども達にとっても、たくさんの愛情を得られた乳幼児期を過ごした場所としての「ふるさと感」につながり、人生のスタートの豊かさがその後の人生にも多大なる影響を与える重要な事業だと感じている。
- ・子育て支援は生活を応援すること。子どもが生まれたことで地域に関心が深まるこの時期を逃さず子育て家庭を地域に温かく受け入れていくこと、子どもに関わることで地域の将来に思いを馳せることのできる市民を増やしていくことがサステイナブルな地域づくりにつながる。

長岡市国際交流センター「地球広場」センター長 羽賀 友信 氏

- ・「市民センター」を17年前からスタート、その後市民活動団体助成金が設置され市民活動を後押し。
- ・平成16年10月の新潟県中越地震以降、高齢化、人口減少が震災を機に一気に加速したため、復興のプロセスでは、住民の意思をくみ上げ地域課題を解決する第3者機関として、NPOがいくつも立ち上がった。
- ・市民協働条例は3年の年月をかけ、多世代、多地域で延べ1000人が参加するワークショップを開催し、住民の意思が強く反映されるものになった。
- ・現在、市民団体の数は539団体。複数の団体が連携をしてイベントを実施すると相乗効果を生んで連携が進む。
- ・平成23年 市内にある3大学1高専と市が連携した「まちなかキャンパス長岡」を設置。学びの楽しさを知る「まちなかカフェ」→連続のテーマを持つ「まちなか大学」→その卒業生を中心とした「まちなか大学院」→市に提案を行うプロジェクトを実践する「まちづくり市民研究所」と、人材が高度人材に成長できる学びのプロセスを持っている。
- ・市内全域にある13か所の「子育ての駅」も官民協働で運営。
- ・教育委員会では、平成17年から「熱中！感動！夢づくり教育」を行っている。年間5億円の予算。官民協働により実施。
- ・平成27年から産官学金の29参画機関が連携し、未来を担う若者をサポートする「ながおか・若者・しごと機構」が設立され、活発な活動を展開。
- ・人事をつくり、次に活躍しやすいシステムを官民連携でつくり、最後に活動拠点をつくるというシステムの「長岡方式」と呼ばれる人材育成。
- ・今年、3大学1高専の特色・専門性と企業家の技術、自由な発想を融合し、新産業の創出と次代に対応する人材を育成するため、市の中心部に「NaDeC BASE (ナデックベース)」をオープン。7年後には同じ場所に、再開発で、商工会議所、銀行、図書館が入った米百俵プレイス(仮称)が設置され、未来の起業家の育成にとって大きなチャンスをつくっていくことを期待する。

◇閉会式

◇行政視察：アオーレ長岡と中心市街地

①子育ての駅ちびっこ広場

絵本館を取り入れた子育て支援施設。約1万3千冊の絵本や育児書を備えている。

司書及び読み聞かせボランティアと、連携・協働した事業を実施している。

②NaDeC BASE (ナデックベース)

市内3大学1高専と企業の交流の場。学生の活動や異業種交流の場(コワーキングスペース)、発想を形にできる3Dプリンターなどを設置し、学生、企業、市民と、多様な企画・モノが交わることで、産業をはじめ、地域の課題解決、人材育成など、さまざまな分野でのイノベーションを促している。

③アオーレ長岡（議場、ホール他）

JR長岡駅前の旧長岡市厚生会館及び周辺の公園等を含めた約1.5haの区域に、厚生年金会館機能を受け継ぐ“アリーナ”、冬季でもさまざまな活動ができる“ナカドマ(屋根付き広場)”、“市役所本庁機能”を一体的に配置した複合施設。約35000㎡の延床面積の半分以上が市民交流のスペースで、まちなか型公共サービスの核となる施設として、周辺施設との連携と波及効果が期待される「新たな市民協働の拠点」。隈研吾氏の設計。

□特色

- ・市民と議会の一体感を醸成するために、大勢の人が集まるナカドマに面した1階に議場を配置。
- ・県内初の行政施設内の福祉カフェを設置。
- ・アリーナは、大開口扉を開ければナカドマとの一体的な利用が可能。
- ・3つの建物に囲まれたアオーレ長岡の中心で、集い、語り合い、さまざまな活動ができる自由空間のナカドマ(屋根付き広場)。
- ・市民交流ホールAは、各種発表会や演奏会に最適で、電動式の可動席で会場設営が非常に楽。
- ・総合窓口は、平日の夜間、土・日・祝日も開設。相談、証明発行などの手続きに合わせ、ワンストップでのサービスを提供。複数の手続きも、市民は動かず担当職員が入れ替わりで対応。

④まちなかキャンパス長岡

市内の3大学1高専と長岡市が協働で「学び」をプロデュースし、新たな「交流」を創出している、「学びと交流の拠点」。

気軽に受講できる単発講座「まちなかカフェ」から、じっくり学べる連続講座「まちなか大学」などのほか、まちキャンポランティアスタッフや市民、企業が企画・実施する講座など、多彩なジャンルを楽しく学ぶことができる。

○所感(知立市への反映等について)

今年、開府400年、戊辰戦争150年の節目の年を迎えた新潟県長岡市。歴史的な土壌、戦災や自然災害などから復興を遂げてきた不屈の精神、それによって築かれてきた市民力、地域力というものが最も印象的でした。

今回の第80回全国都市問題会議は、2012年4月にオープンしたシティホールプラザ「アオーレ長岡」での開催でした。JR長岡駅からスカイデッキを経由してわずか3分ほどのこのアオーレ長岡は、屋根付き広場「ナカドマ」を中心に、市役所の窓口機能が集約して置かれた東棟、市議会議場と3つの市民交流ホール、施設の運用全般を担う市民団体が入る西棟、イベントやスポーツ、コンサートなどさまざまな用途に使うことができるアリーナ棟の3つの建物からなっています。市役所と市民の間にある垣根を取り去り、市民の中に溶け込む市役所づくりを目指したということです。

長岡市は、もともと地域の祭りや伝統行事、さまざまな催しなど、市民の自主的な活動が活発に行われていて、その市民活動を徹底して支援してきたことがまちの活力を生み、また、自由な発想でスピード感を持って行動できるNPO等の市民団体の特性を行政と効果的に組み合わせることで、課題

の解決や新たな施策に結びつけてきたそうです。さまざまな角度から市民同士がつながり、市民が自らつくりあげる、それを行政がどれだけ寄り添ってサポートできるか。行政と市民の持つ特性や持ち味を組み合わせ政策実現に結び付けた活動の積み重ねの上に、この「アオーレ長岡」が誕生しました。まさに、歴史的な土壌やこれまで培ってきた精神、市民活動を踏まえた長岡市の象徴、市民の心のよりどころとなっているということは言うまでもありません。

また、長岡市では、戊辰戦争に敗れた長岡藩に、支藩から見舞いとして送られた百俵の米をその時の飢えをしのぐためには使わず、「何事も基本は人。人づくりこそすべての根幹である」と教育の大切さを説いて学校設立の資金に充てたという歴史的背景から「米百俵の精神」が大切にされています。この「米百俵の精神」は長岡のまちづくりの源になっていて、職員の方の話を聞いてもこのフレーズを耳にし、駅前を歩いても目にすることが多く、この精神にのっとなって、すべての長岡市民が一丸となってまちづくりをしている印象を受けました。こういった強い共通意識を持てることが、市民活動やそれによって生まれるまちづくりのエネルギーを生み出していると思います。また、現在では「新しい米百俵」として、人材育成にさらに力を入れています。市民全体の共通意識を持てるように促していくこと、とどまることをせず、何十年何百年先の未来を想って人づくりに取り組むことの必要性を感じました。

当市においても、現在100年に一度の大事業と言われている知立駅前立体交差事業や駅前再開発事業が行われています。今回訪れた長岡市をはじめ、それぞれの地域の事例などを参考に、地域の状況に応じた協働への取り組みが重要だと強く感じました。そして、知立市民の誇りとなるような場所づくりができるよう、市民みなさんとの対話を大切にして、また、市民と行政との架け橋としての役割を担い、取り組んでいきたいと考えています。